

妖怪横丁の厄介者

灰野真央

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼太郎はある日、人間界で一人の子どもを見かける。かなり強い妖気を出している子どもに襲われた鬼太郎と猫娘。

だが、その子どもは何と、遠く北の地からやって来た流れ者の妖怪で……。

新しく妖怪横丁にやって来た厄介者の妖怪が、鬼太郎達と様々な事件を解決していく！

目次

鬼太郎との出会い	4
出会い	1

出会い

く 鬼太郎視点く

ある日、僕がいつものように人間界を散歩していると、何処からか鼻がもげそうな程の異臭が漂ってきた。

『鬼太郎！ 気を付けろ、とんでもなく強い妖気じゃ！』

「はい、父さん！」

僕は咄嗟に鼻をつまみ、足音を消して異臭のする方向へと向かった。薄暗い路地の奥に見えたのは、一人の子どもの背中。何やら見慣れない模様の着物を着ている。まさか、この異臭の原因はあの子どもなのか？

「父さん、あれは……う？」

僕は頭上にいる父さんに聞いてみる。すると、父さんは小さく唸つて言った。

『残念じゃが……ワシにも分からないのう……。妖気の強さから考えるに、相当の強者じゃろうが……』

父さんでも分からない妖怪がいるなんて……。ここは様子を見た方がいいのかも知れないな……。

その時、運悪く猫娘が僕らに声を掛けてきた。同じように鼻をつまんで、しかめ面をしている。

「鬼太郎！ 何なの？このひどい匂い」

「シーッ！ 向こうに気付かれる！」

僕が彼女を止めた時には既に遅く、子どもは身体をこちらに向けて僕らに襲いかかってきた。

「シャアアアアアアッ!!」

「危ないっ！」

「きゃあっ!?!」

僕は猫娘を突き飛ばして、そのまま子どもの体当たりをまともに食らってしまった。暫く地面を転がり、何とか止まったものの、全身の痛みが僕を襲う。

「く……っ」

「鬼太郎！」

猫娘は僕に駆け寄ろうとしたけれど、子どもは猫娘に向かって牙を剥いた。けれど、その姿は既に子どもではなく、巨大な大蛇だった。ギラギラと不穏な光を宿す赤く縁取られた金色の目は、見る者の背筋を凍らせる。歪に口角を上げて笑う口から覗く鋭い牙は、鈍く光って不気味さを醸し出し、薄墨色の身体を持っている。こいつは一体、何なんだ……!?

『鬼太郎、しつかりせい！ 猫娘がやられてしまうぞ！』

「分かって、ます……!」

立ち上がるうとして足に力を入れる。けれど、立ち上がれなかった。まるで全身の力が抜けたみたいなのに、動けなくなった。猫娘は必死に応戦しているけれど、既に傷だらけだ。強すぎる……。

その時、異変を察知した八咫鳥の群れが、僕らを包んで妖怪横丁へと運んでくれた。そいつは、その後をしつこく追いかけてくる。遂に妖怪横丁へと侵入し、どんどん僕らとの距離を詰めてくる。

『いかん！ このままでは、じきに追いつかれるぞ』

父さんの焦った声を聞いて、僕は必死に頭を動かす。あいつの弱点は何だ？ それさえ掴めれば、弱らせることだってできるだろう。考えろ、鬼太郎！

すると、下からおばばの声が聞こえてきた。

「侵入者め、この砂でも食らうが良い！」

『があああああ!? 砂、だと……!?!』

壺をひっくり返す音と砂が流れ出る音がほぼ同時に聞こえ、大蛇の苦しむ気配がする。何か特製の砂でも使っているのだろう。みるみる大蛇の気配が離れていき、僕らは間一髪のところまで難を免れた。

何とか家に辿り着き、一羽の八咫鳥が妖怪横丁の妖怪達に治療を頼みに行ってくれた。すぐに一旦木綿や烏天狗などの妖怪達がやって来てくれて、僕らの傷を見てくれた。

「こりゃあ、ひどいな。相当な力で体当たりされたんだな、鬼太郎」

「ハハ、まあね。ありがとう、烏天狗」

「いいってことよ。それよりも、さつきおばばが誰ぞに砂をかけてい

だが……あやつは何者だ？」

「それが……」

言いかけたところで、僕の家戸口に立った影があった。そちらを見らる。

「鬼太郎。入って良いかえ？」

「おばば？ ……つて、ええ!？」

綱を持ったおばばと、人間界で見た子どもだった。

鬼太郎との出会い

くオヤウ視点く

俺は気付いたら砂まみれで地面に倒れていて、そこから婆さんに問答無用で縄で縛られて、ある家の前へと連れて来られた。その中にいたのは、左目を前髪で隠している茶髪の少年と、猫のように縦長の瞳孔を開いて警戒している少女だった。その他は、俺の知らない奴らばかり。

「鬼太郎。入っても良いかえ？」

「おぼば？ ……って、ええ?!」

茶髪の奴は俺を見て、驚いた様子で目を丸くしている。そうか、こいつは鬼太郎って言うのか……。

「こいつ、さつき人間界で見た奴よ！ 今度こそ、ギタギタにしてやるんだから！」

『まあまあ落ち着け、猫娘。今は争わず、話す方が良い』

俺は、鬼太郎の頭からひよっこり覗いた目玉を見て、思わず後ずさった。

「な、何だよ、こいつ……！ 目玉が喋りやがったぞ?！」

何がどうなってる？ 俺の知ってる世界とは、まるつきり違う……。まさかこいつらも、違う場所にいる精霊なのか……? ?

そんなことをグルグルと考えていると、婆さんは俺を卓の前に座らせて、何故ここに来たのかと問うた。

俺は、上手く説明できるかどうか分からない、と前置きを入れてから、説明を始めた。

俺は、元はここから遙か北の地に住んでいた。人間達からは『オヤウカムイ』と呼ばれ、古くから恐れられてきた。ある湖の主として長い間君臨し、そこで悪業の限りを尽くした。

悪臭を出して人間達を追いかけ回す。家畜や動物を殺す。草木や作物を枯らす。水を穢す。精霊を殺したことだって何回かあった。

遂に、それを見かねたある英雄神二人が、俺を退治しにやって来た。初めは俺は歯牙にもかけていなかった。どうせこいつらも、すぐに

俺の悪臭に触れば皮膚が焼け爛れて重傷を負うか、死んでしまうに決まってる。そう思ってた力が括っていた。しかし、そいつらは俺の予想を遥かに裏切った。最初は俺の優勢だった。悪臭を振り撒き、二人の動きを止めてジワジワと皮膚を侵食させていく。ところが、そこで俺は気を緩めてしまった。途端に反撃に遭い、俺は蓬の葉を擦り付けた矢を何本も受けて重傷を負い、終いには氷の精霊が助太刀に現れて電を降らせた。俺の動きが鈍くなったところで、そいつらは肩から提げている刀を抜いて俺の身体を斬り刻み、再生できないように処理しやがった。

「どうだ？ オヤウカムイ。これに懲りたら、二度と悪さをするんじゃないぞ」

「……………この……………クソツタレがああああああつ!!!」

俺は最後の力を振り絞って牙を剥き、そいつの腕を噛みちぎろうとした。だが、その時には既に、俺の魂は天へと昇る為に身体を離れていた。

「離せつ！ せめてあいつの腕だけでも喰いちぎらせろ!! そうでもしねえと収まらねえんだよおっ!!」

そんな俺の叫びも虚しく、遂に天界へと帰ってきた俺は、すぐさま一人の子どもの肉体に魂を移されてそのまま人間界へと送られた。その時に言われたことは、たった一つ。

「償え。罪深き我が同胞よ」

詳しい方法も聞かされないまま、俺はあてもなく人間界をひたすら彷徨い、誰からも相手にされず、何かを手伝おうとしても気味悪がられ、避けられる日々を送っていた。苛立ちが募り、胸の内に溜まった黒い塊を吐き出せないまま、ただ空虚な毎日を過ごしていたのだ。

「……………で、あんたらがたまたま見えたもんだから、八つ当たりっつか、何っつか……………とにかく、悪かった。この通りだ」

俺は一通りの説明を終えて、鬼太郎に向かって深く頭を下げた。

今更謝っても、許しちやくれなйдらうな……………。半分諦めかけていた時、鬼太郎が俺の肩を叩いてくれた。

顔を上げると、鬼太郎は笑って頷き、こんな提案をした。

「君の抱えてる事情は分かった。これからは、ここで僕達と一緒に人間達を助けていこう。妖怪に襲われてる人間達を、僕らが助けるんだ」

急に提案された内容が一瞬理解できず、俺は怪訝な顔を鬼太郎に向ける。周りの奴らも、ウンウンと頷いている。どうやら、俺はここでは嫌われてはいないようだ。だが……。

「俺の……この悪臭はどうするんだ？」

何気なく口に出した疑問に、婆さんが俺に小袋を渡してくれた。

「これは……？」

「おぼば特製の砂じゃよ。これを腰に下げておけば、お前さんの匂いも軽くなるじやろうて」

ニヤリと笑った婆さんは、鬼太郎に向かって頷く。

鬼太郎は俺に手を差し出して言った。

「僕はゲゲゲの鬼太郎。幽霊族の唯一の生き残りだよ。そして、ここは妖怪横丁。色んな妖怪達が住んでいる町なんだ。これから宜しくね、オヤウカムイ」

「いい、のか？ こんな俺でも……？」

「いいんだよ。妖怪でも人間でも、困ってたら放っておけないんだ」

困ったように笑った鬼太郎を見て、俺はこいつを信用できると判断した。

それでも、あまり人間アイヌに触れたことがない俺は、恐る恐る右手を出して鬼太郎と握手を交わした。

『良かったのう、鬼太郎。これでまた、心強い味方が増えた訳じゃ。めでたいから、酒でも出して振る舞ってやれ』

「はい、父さん。今持ってきてきますね」

この一言で、鬼太郎の家の中がパツと明るくなった。場所は違えど、やはり酒好きは多いらしい。

『なあ、オヤウ。ワシは目玉オヤジと言うんじや。こう見えても、立派に鬼太郎の父親じゃぞ。えっへん！ そういうことで、よろしく頼むぞ！』

「あ、ああ……そうですかい。こりやまた、奇妙な親で……。まあ……

これから、宜しくお願いします……」

目玉オヤジを皮切りに、猫娘、烏天狗、砂かけ婆、子泣き爺、ヌリカベ、一旦木綿など、たくさんの妖怪達が俺に自己紹介をした。一度に入ってくる情報の量が多すぎると、久しぶりに本来の姿に戻ったのと、今まで溜め込んでいた疲労が蓄積していたことが重なり、急激に俺の意識は闇の中へと落ちていったー。